

## 行政支援情報

近年のヒラメ発生状況から予測される今後のヒラメ漁獲量増加

福島県水産試験場 栽培漁業部

平成 17 年福島県水産試験場 HP

分類コード 19 - 05 - 40000000

部門名 水産業－栽培漁業－ヒラメ

担当者 富山 毅

### I 新技術の解説

#### 1 要旨

- (1) 本県におけるヒラメの漁獲量は平成 8～14 年にかけて 420～700 トンの高水準であったが、平成 15 年以降は 240～320 トンと低下している（図 1）。漁獲されるヒラメの大部分は天然魚であり、漁獲量の変動は天然魚の発生動向に大きく影響される。
- (2) 平成 10 年以降での水工研 II 型桁網による調査結果および平成 6 年以降での相馬双葉漁業協同組合請戸支所所属船の自家用釣餌料板びき網による調査結果から、天然当歳魚の発生状況を整理した。自家用釣餌料板びき網に入網したヒラメ天然当歳魚の平均個体数は平成 12～15 年では 30 分操業あたり 1.5 個体以下であったが、16 年では 5.6 個体、17 年では 21.1 個体と多かった（図 2）。17 年の発生量は 7 年と同水準であり、卓越年級であると考えられる。これは水工研 II 型桁網による調査結果からも裏付けられた。
- (3) 市場調査による漁獲状況のデータを用いて、年ごとの天然魚の年級別漁獲量を集計した（例：平成 17 年の漁獲量は平成 14、15、16 年級の合計）。餌料板びき網での当歳魚の入網尾数とその後の漁獲量には正の相関がみられ、特に 2 年後および 3 年後の漁獲量と強い相関を示した（図 3）。得られた回帰式から 16 年級天然魚の平成 18、19 年の漁獲量をそれぞれ 235、151 トン、17 年級天然魚の平成 18、19 年の漁獲量をそれぞれ 177、475 トンと算出した。放流魚の漁獲量は平成 12～16 年において年平均 61 トンと推定され、平成 18、19 年も同等量が見込めるものと仮定し、また平成 15 および 18 年級天然魚の漁獲量を誤差として無視した場合、平成 18、19 年のヒラメ漁獲量はそれぞれ 473、687 トンと推算された。

#### 2 期待される効果

ヒラメは漁獲量、漁獲金額ともに沿岸漁業（底びき網、さし網）の重要な位置を占めているため、漁獲量の増加に伴う沿岸漁業の活性化が期待される。

#### 3 適用範囲

漁業者

#### 4 普及上の留意点

ヒラメ資源が増加することは明らかであるが、小型サイズでの漁獲が多くなれば経済的な効率が悪く、なるべく大型サイズで漁獲するように心がける必要がある。また、卓越年級では成長が悪化する場合もみられており、このことを留意すべきである。

## II 具体的データ等

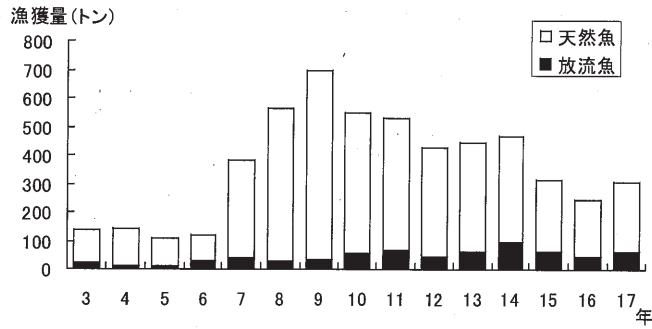


図1 福島県のヒラメ漁獲量

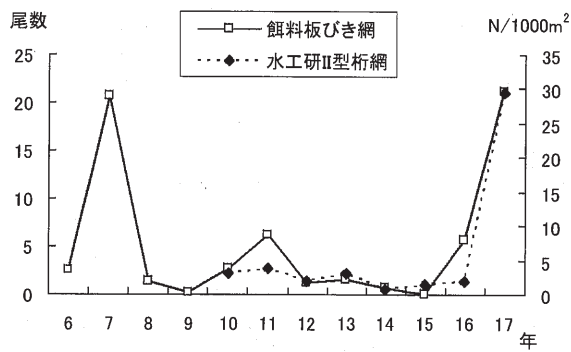


図2 年級別のヒラメ天然当歳魚の発生量

左軸は餌料板びき網 30分操業での採集尾数、右軸は水工研 II 型桁網による調査から推定した分布密度、餌料板びき網での尾数は 8～9 月の平均値、桁網での密度は調査日ごとに集計した中での最大値。

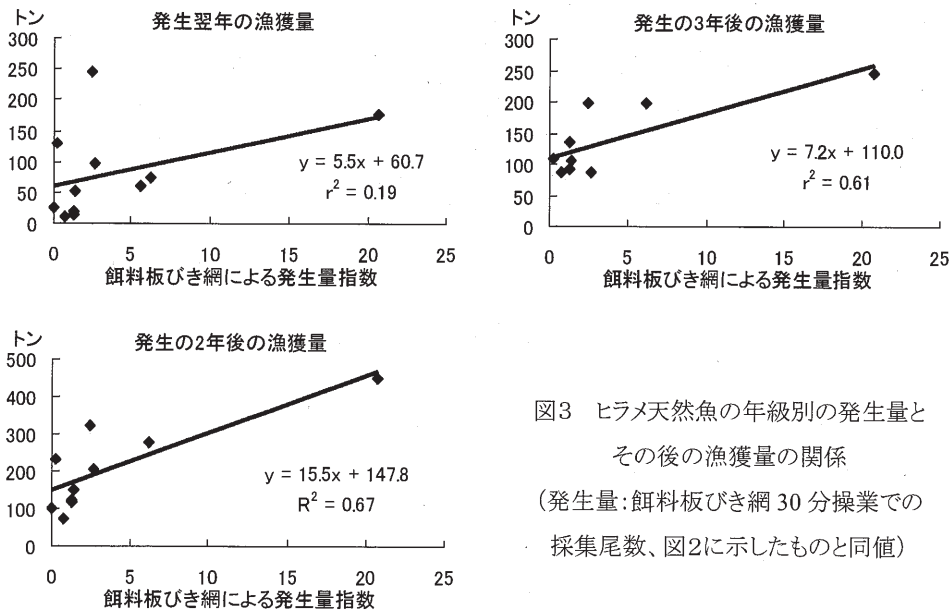


図3 ヒラメ天然魚の年級別の発生量と  
その後の漁獲量の関係  
(発生量: 餌料板びき網 30分操業での  
採集尾数、図2に示したものと同値)

## III その他

- 1 執筆者 : 富山 毅
- 2 その他の資料等: 特になし